

目 次

第1部 情報爆発への警告 —論文における倫理とは?— 1

1. 不正行為から発表倫理へ 2
 - 1.1 ジョージタウン大学で 2
 - 1.2 はじまりは情報爆発から 4
 - 1.3 情報爆発から発表倫理へ 5
 - 1.4 新たに発生した問題 7
 - 1.5 発表倫理へのプライスの指摘 8

2. 生物医学雑誌への統一投稿規程の誕生 10
 - 2.1 バンクーバーへ 10
 - 2.2 最初の会場場所は 11
 - 2.3 ヒュース博士へのメール 12
 - 2.4 誕生のエピソード 14
 - 2.5 初期の問題 16
 - 2.6 普通の声に耳を傾ける 18

3. 必要な重複発表 20
 - 3.1 リーズ城での会議 20
 - 3.2 1982年の第2版と1984年の声明 21
 - 3.3 重複出版の現状をPubMedから見る 22
 - 3.4 重複出版論文の掲載誌に特徴はあるのか 25
 - 3.5 重複投稿を推奨する? 26
 - 3.6 新たな課題の明確化 27

第2部 論文の真の執筆者は誰か—責任は誰に?—

29

4.	イグ・ノーベル賞に見るオーサーシップ	30	
4.1	オーサーシップとは?	30	
4.2	論文発表から見たオーサーシップ	31	
4.3	イグ・ノーベル文学賞, 多数著者と多産な著者	33	
4.4	オーサーシップの定義	35	
4.5	ノッティンガム会議での新提案	36	
4.6	オーサーシップをめぐる日本の状況	38	
5.	ゴースト・オーサーシップの実態	40	
5.1	歴史のなかのゴースト・ライティング	40	
5.2	ゴーストからの誘い	42	
5.3	ゴースト・オーサーシップの実態	43	
5.4	定義を考える	45	
5.5	臨床試験結果の発表	47	
6.	コレスポンディング・オーサーの役割	50	
6.1	コレスポンディング・オーサーの役割	50	
6.2	論文ねつ造事件から問われたコレスポンディング・オーサー	52	
6.3	コレスポンディング・オーサーは, 何番目の著者か?	53	
6.4	統一投稿規程でどのように取りあげられているのか	54	
6.5	Nature Journals が求めるコレスポンディング・オーサーの責務	55	
7.	オーサーシップのグローバル化	58	
7.1	研究活動におけるグローバリゼーションの進行	58	
7.2	国際共著論文の増大	59	
7.3	国際共著関係マップ	60	
7.4	日本の国際共著リンク国の変化	62	
7.5	論文の生産数変化と国際共著関係	63	

第3部 公正さを欠く論文評価 65

—論文の審査と発表における公正さを維持するためには?—

- 8. レフェリー・システムの限界 66
 - 8.1 日本医学雑誌編集者会議で 66
 - 8.2 編集者の積極性 68
 - 8.3 諸刃の剣 69
 - 8.4 Open peer review の提案 70
 - 8.5 親展文書と先取権競争への対応 71
 - 8.6 フィルターとしてのコレスポンス欄 72
 - 8.7 レフェリー・システムの改善へむけて 73

- 9. ネガティブな研究結果は好まれない 75
 - 9.1 19世紀末の米国で 75
 - 9.2 論文発表から見た出版バイアス 76
 - 9.2.1 年次変化 77
 - 9.2.2 主要研究者(キーパーソン) 77
 - 9.2.3 主要掲載誌(キージャーナル) 78
 - 9.2.4 共出現する MeSH キーワードランク 80
 - 9.3 統一投稿規程と MeSH の定義 81
 - 9.4 出版バイアス問題に気づいた人々 82
 - 9.5 臨床試験と企業資金 83
 - 9.6 公共における知識の生産 83

第4部 扱い基準のない撤回論文 85

—実例で見る不正行為のボーダーラインは?—

- 10. 撤回声明から懸念表明へ 86

10.1	研究知見の撤回声明	86
10.2	不正は不幸なできごとか？	87
10.3	契機としてのスラツキー事件	88
10.4	米国国立医学図書館の対応	90
10.5	撤回論文と撤回公告の現状	91
10.6	撤回措置の難しさと懸念表明	92
11.	日本の論文検索サイト医中誌 Web から見た撤回	95
11.1	データベースの品質管理	95
11.2	医中誌 Web から撤回論文を検索する	96
11.3	撤回の理由	97
11.4	撤回記事は誰の名で記載されているか	99
11.5	海外からの不正論文投稿	100
11.6	エラータで良いのか	101
11.7	求められること	102
12.	米国の論文検索サイト PubMed から見た日本の撤回	104
12.1	論文の撤回	104
12.2	調査をどのように行ったのか	105
12.3	撤回論文数をめぐって	105
12.4	撤回理由	107
12.5	撤回論文掲載誌と発表機関の特徴	109
12.6	撤回理由を比較する	110
<hr/>		
第5部	生き残るために	113
	—公正な研究・論文に必要なこととは？—	
<hr/>		
13.	利益相反 (COI) と産学連携	114

13.1	学術研究の市場化	114
13.2	科学政策と研究資金の変化	115
13.3	バイ・ドール法と産学連携	117
13.4	資金源から見た米国の生物医学研究	118
13.5	日本の国立大学における外部資金獲得	120
13.6	Conflict of Interest の意味	120
13.7	論文数から見た利益相反	121
13.8	発表倫理からのアプローチ	125
14.	インパクトファクターから読む学術雑誌出版	127
14.1	インパクトファクター	127
14.2	世界と日本の雑誌の IF 値を見る	128
14.3	日本誌は 10 年間にどう変化したか	129
14.4	中国, 韓国, シンガポール, インド, オーストラリアとの比較	131
14.5	IF 値分布から見たエルゼビア, シュプリンガー, NPG 社	132
15.	研究公正局 (ORI) の役割	136
15.1	研究公正局への道	136
15.2	80 年代のボルチモア・イマニシ=カリ事件	138
15.3	研究公正局の形成と活動	139
15.4	研究公正局から編集者へ	141
15.5	不正論文に気づいたら	142
15.6	訂正と撤回を知らせる	143
	欧文索引	145
	和文索引	148

